

USER Interview

竹沢うるま [写真家]

Uruma Takezawa

DreamLabo 5000



DreamLabo 5000 で展示そのものをアーカイヴ。
それは写真集とは異なる、もうひとつのメディア。

竹沢うるまさんは、世界各地の風景や人々の生きる姿を、その土地の空気とともに写し出す写真家です。

2010年から2012年にかけて、千日を超える旅をし、103もの国で35万点もの写真を撮影。その記録をまとめた写真集『Walkabout』は大きな反響を呼びました。2014年には、第3回日経ナショナルジオグラフィック写真賞グランプリを受賞し、以降もキューバの空気を音を頼りに記録した『Buena Vista』や、“祈り”をテーマにヒマラヤ周辺の生活を写した『Kor La - コルラ-』など、多くの写真集を出版。描かれる景色は思わず息を飲むほど美しく、臨場感のある写真は、見る者を旅の世界に引き込みます。

2016年、竹沢さんはキャノンのハイクオリティオンデマンド印刷機DreamLabo 5000を使い、DreamLabo版『Kor La』を制作しました。紙らしい手触り感のある風合いを持つファインアート紙に描き出される写真を竹沢さんはどう評価し

たのでしょうか。

デザインを担当したナノノグラフィックスのおうちおさむさんとともにお話を伺いました。

— DreamLaboの出力をはじめてご覧になったときの印象と、写真集を作ることになったきっかけを教えてください。

竹沢 ● はじめて見たサンプルはすべて光沢タイプの紙だったのですが、そのときは“きれい過ぎる”という印象でした。“写真プリントがそのまま本になる”ということでしたが、写真プリントは写真プリントであり、本は本だと思んです。だから、光沢系の写真プリントをそのまま本にしてしまったら、あまりにも情報量が多過ぎてしまう。すべてが表現されてしまうと、イメージネーションが阻害されてしまいます。正直なところ、自分の写真にDreamLaboは合わないなと思っていました。

おうち ● (竹沢)うるまさんは最初、「インクジェット方式の印刷機に興味はあるけれど、光沢タイ

プの紙ではやりたくない」と言っていましたよね。その後、紙の風合いを残したファインアート紙が開発されて、「これならやりたい」と。それで相談を受けて、DreamLabo版『Kor La』の制作がスタートしました。

— ファインアート紙をご覧になったときの印象を教えてください。

竹沢 ● “触ったときの風合いがいい”というのが第一印象です。“本にしたとき、めくっていく楽しみがありそうだな”と。そういった紙は再現性は低いことが多いのですが、本として成立するには十分な再現性も持っていました。再現性と質感のバランスが一番いい紙だと思いました。

おうち ● 本は触れてページをめくるものなので、それにふさわしいしつらえが絶対に必要なんです。光沢タイプの紙は再現性という点で高いポテンシャルを持っていますし、それ以外の印刷用紙を否定するわけではないですけど、うるま



DreamLabo 5000

USER Interview

『Kor La』(コルラ)

写真：竹沢うるま
デザイン：おうちおさむ
「コルラ」とはチベット仏教徒が信仰の対象を時計回りに巡礼すること。
オフセット印刷版が小学館より発行されている(3,400円+税)



DreamLabo版『Kor La』は、アクリルケースに収納され、格調高いパッケージに仕上がっている
仕様：A3変型・上製本
用紙：ファインアート
販売価格：50,000円
30冊限定

紙はDreamLabo専用のファインアート紙を使用。紙らしい風合いを残しつつ、解像感のある写真表現を実現している

さんの写真と僕のイメージする本づくりの方向性に合う紙はファインアート紙しかない、そう感じましたね。

— ファインアート紙の再現性についてはどのように感じましたか。

竹沢 ● デジタルカメラも撮る側からすると、画素数が多ければ多いほどいいというものではありません。それと同じで再現性が高いからいいということでもないと思います。(光沢タイプに比べて)多少、再現性が落ちたとしても、その紙を使うことがひとつの表現につながっていく。そこにおもしろさがあると思います。

おうち ● この本はそれで成功していますよね。ファインアート紙は光沢タイプよりは色や解像度が出るわけではありませんが、いわゆる普通のマット紙にオフセット印刷だったら、ここまで絶対に出ない。彩度もなくなり、ディテールも潰れてしまいます。DreamLabo+ファインアート紙を使うことで、インクジェットの嫌な部分を消しつつ、オフセット以上の表現ができたと思います。

— オフセット印刷で写真集を作るときと比べて、



どこに違いを感じましたか。

竹沢 ● 一番の違いは色の調整ですね。印刷現場で色を詰めていったのですが、調整するとすぐに校正紙が出てくる。DreamLaboはデータさえしっかり作れば、安定して同じ色を出すことができるのもオフセット印刷との違いだと思います。

おうち ● オフセット印刷では予算問題で校正と本刷りの条件が違うことがあって、その場合、本刷りの現場で最終的に調整することになります。これが本当に大変なんです。その点、DreamLaboは最後までデータ側で調整できる点はいいですね。

あとは色が転ばないこと。インクジェット印刷は、オフセット印刷のように他のページの色の影響を受けることもなく、色を完全に分離できます。これは大きなメリットだと思います。

— データ制作側で色を完全にコントロールできるというのは、フォトグラファーにとって、メリットがあると感じますか。

竹沢 ● 難しい質問ですね。いくらでも色をコントロールできるぶん、逆に色の着地点がはっきり見えていないと延々と作業が続いてしまいます。やるなら締切をつくっておかないと危険です(笑)。

— DreamLabo版『Kor La』は5万円という価格ながら、すぐに完売したそうですね。

竹沢 ● 30部限定でしたが2週間で完売しました。決して安くない金額ですが、その価値を認めたくて買ってくれているということが非常に印象的でした。モノとして、パッケージとして5万円の価値を生み出しているのはやはり“質感”だと思います。質感こそが価値なんですよ。

おうち ● いまは安くても豪華なものはたくさんありますよね。そのなかで5万円の価値を感じてもらうために、本としてふさわしい質感を作り上げていくだけでなく、専用のアクリルケースも用意しました。今回、この本が完売したことで、今後、同じようなものを作る可能性ができたと感じています。

竹沢 ● DreamLaboでこの本を作って、写真家として一番うれしかったのは“展覧会のアーカイヴができた”ということです。写真家にとっては写真展がすべてであり、プリントが並ぶあの空間こそが本当の自分の世界なんです。でも、展示は短ければ1週間で消えてしまいます。それがアクリルケースに入った本というかたちでアーカイヴされ、5年後、10年後、思い立ってふと本を開けば、そこに展覧会がよみがえる。そうして展示を残せるということは、写真家としては本当に幸せなことだと思うんです。

このアーカイヴは、展示と写真集の間にある、もうひとつの新しいメディアと言えるのではないのでしょうか。

竹沢うるま

Uruma Takezawa

1977年生まれ。同志社大学法学部法律学科に入学。在学中、沖縄を訪れて海の中の世界を初めて見て驚き、自身が見て感じたことを記録に残そうと写真始める。その後、アメリカ一年滞在を経て、独学で写真を学ぶ。卒業後、ダイビング雑誌のスタッフフォトグラファーとして水中撮影を専門とし、2004年より写真家としての活動を本格的に開始。2010年～2012年にかけて、1021日103カ国を巡る旅を終え、現在に至る。